玉造中だより
楽し学舎（まなびや）
No. 15
R2・8・17

修学旅行・宿泊学習中止！体育祭の保護者等の制限！でも私たちは決して負けない！

今日から学校が再開されました。今年は新型コロナウィルスの感染拡大により二ヶ月間の臨時休校期間があったために、夏休みも例年よりかなり短縮された十日間という期間になりました。そして、短い夏休みに入る前に、私たちにとっては衝撃的なニュースがありました。それは「今年度の修学旅行及び宿泊を伴う学校行事は中止」という決定でした。その主な理由としては「生徒の安全を優先」したことです。具体的には

・新型コロナウィルスの感染者が全国的に拡大していること
・訪問地においても感染者が増加していること
・万が一旅行中に感染者が発生した場合、現地での対応が十分にできないこと
・旅行先から帰って、家族等に感染させる危険性があること

などです。

特に三年生にとっては中学生活最高の思い出となり、楽しみにして準備していた修学旅行がなくなったことで、本当に悔しくてたまりません。

また、夏休み前日に配布された「体育祭の案内」「保護者等の応援について」にあったように、九月五日に予定されている体育祭についても、これまでとは違い、

・半日での開催
・感染症対策をした上での競技の実施
・保護者等の応援については、三密を避けるために今年度は「三年生の保護者に限定」

などのこれまでと違った体育祭の開催となります。

このように今年度の様々な行事が新型コロナウイルスにより、中止または変更を余儀なくされました。このままだったら、令和二年度を何年後かに振り返った時に「新型コロナウイルスで大変だった」だけで終わってしまいます。それで令和二年度の思い出がそれだけで終わってしまっていいんでしょうか？ある評論家が「新型コロナウイルスの影響で自粛はしても、萎縮する必要はない」と言っていました。

コロナに立ち向かう玉中生

「コロナに立ち向かっていった人たちがいた」

制限された活動の中で工夫をする。

これからの教育活動は新型コロナウィルスにより今までとは違って何らかの制限を受けることが多くなってきます。「制限」を受けているから何もできない」という発想ではなく「制限されている中で何ができるか、そしてもっと良い方法はないか」という考えを一人一人の生徒が持って欲しいと思います。以前、あるテレビ番組で「困難に立ち向かっていった人たちがいた」というキャッチフレーズが流行りました。その言葉通り、今回の状況の中で、これまでを見直していくことで、新たなことが生まれてくる、これまでよりももっと楽しいことや充実した何かが生まれてくるかもしれません。そのとき前述の「令和二年度は新型コロナウィルスで大変だった」から、「令和二年度は新型コロナウィルスに立ち向かっていった先輩たちがいたおかげで、様々な取組が見直され、玉中が大きく変貌した年になった」と言われるような年にしたいと思います。

まずは体育祭から「もっと良い方法はないか」という視点で

その最初の取組が九月五日に予定されている体育祭。様々な制限がある中での体育祭の練習が間もなく始まります。これまでと同じようにはできません。みんなで知恵を出し、十分に話し合って、よりよい方法を考えていきましょう。思い出に残る、そして玉中の歴史に残る「令和二年度の体育祭」にするために、一人一人が本気になって取り組んでいこう。

学級紹介

二年一組 田中・藤岡学級

級訓「笑級来福」

私たち二年一組の級訓は「笑級来福」です。この意味は「笑う門には福が来る」にちなんで「笑いが絶えない学級には福がいっぱいやってくる」という意味で決まりました。

級訓通り、一組は、みんな明るく、楽しく学級生活を送っています。ただ明るいだけかというと、授業や行事など、やらなくてはいけないことになると、みんなまじめで、パワフルに取り組むことができます。男女の仲も良くて、誰とでも気軽に話すことができ、暗さは一つもありません。

ただ、時々午後の授業になると、居眠りをしてしまう人もいます。そういう人を見かけると、みんなで起こしたりするなど、授業と休み時間の、オンとオフを使い分けることのできる学級です。

担任の田中先生は、とても優しくおもしろい先生です。給食の配膳にこだわっていて、早く準備ができたときはとても機嫌が良くなります。藤岡先生は、今年から先生になったピカピカの新人先生です。でも、英語はペラペラで、ああいう風に英語が話せたらいいなとみんな思っています。

そんな二年一組は、一年間笑顔あふれる学級でいたいと思います。どんなつらいことがあっても、みんな笑顔で乗り越えていきます。そして三月にはこの学級でよかったねとみんなが思える学級にしていきます。

編集後記

「八月だから」

「HIROSHIMA」「NAGASAKI」という言葉は、海外でも十分に通用する言葉だ。それは、やはり世界で初めて原子爆弾が投下された街であるということと、世界の平和を願う人々の合言葉になっていることが大きな理由となっている。

八月六日が「広島原爆の日」。約十四万人の人が亡くなった日が「長崎原爆の日」。一九四五（昭和２０）年のこの日、長崎市に原子爆弾が投下され、約七万四千人の人が犠牲となり、市内の建物の約四割が被害を受け、長崎の街は焼け野原となった。戦後すでに七十五年が経ち、それを経験した人たちはもうわずかとなってしまっている。このままいけば世界の誰もが経験したことのない出来事が風化されてしまう。

今年は新型コロナウィルスの感染拡大の影響で、これまでの学校の歴史にない八月の授業日になった。八月に授業をするからこそみんなに考えて欲しいことがあった。それは前述した「平和」と「いのち」についてだ。今、私たちは新型コロナウィルスの影響で「いのち」を身近に感じている時かもしれない。毎日、当たり前にできていたことが今はできない状況にある。七十五年前は「戦争」により、現在よりももっとひどい状況があった。今も世界では「平和」を脅かされている人たちがたくさんいる。なぜ、人は分かっているのにそんな状況になってしまうのだろう。多くの人の「いのち」を受け継いできた私たち。その「いのち」を次の世代につなげていくために「平和」を考えていくことが私たちの役目だ。